

都道府県・指定都市番号	1	都道府県・指定都市名	北海道	研究課題番号・校種名	1 高等学校
				教科名	地理歴史
研究課題	学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究 ○世界史・日本史・地理関係各科目について、各科目の相互の連携を図り、歴史的な見方や考え方や、地理的な見方や考え方を育成する授業実践の研究				
指定年度	平成 28 年度～平成 29 年度				
ふりがな 学校名（生徒数）	ほっかいどうだてみどりがおかこうどうがっこう 北海道伊達緑丘高等学校（449 名）				
所在地（電話番号）	〒059-0273 北海道伊達市南稀府町 180 番地 4（0142-24-3021）				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.datemidorigaoka.hokkaido-c.ed.jp				
研究のキーワード	「科目相互の連携」「主体的・対話的で深い学び」「思考力・判断力・表現力等の育成」				
研究結果のポイント	○ 科目相互の連携を図ることで、地理歴史の学習の意義についての理解が深まり、学習意欲が高まる傾向がみられた。 ○ 科目相互の連携を踏まえ、課題解決プロセスに基づく主体的・対話的で深い学びや言語活動の充実を図ることが、世界史に対する苦手意識の改善に有効ではないかとの示唆が得られた。 ○ 地域の関係諸機関と連携した体験的な学習活動を行うことで、身近な地域の社会的事象に対する生徒の興味・関心を高めさせ、歴史的・地理的な見方や考え方の育成につながった。				

1 研究主題等

(1) 研究主題

地理歴史科（世界史・日本史・地理）の科目相互の連携を図った授業実践の研究

【研究仮説】地理歴史科における科目相互の連携を図り、社会的事象の意味や意義、概念等を関連付けて総合的に捉えさせることで、地理歴史についての学習意欲や学力をより向上させることができるのではないかと。

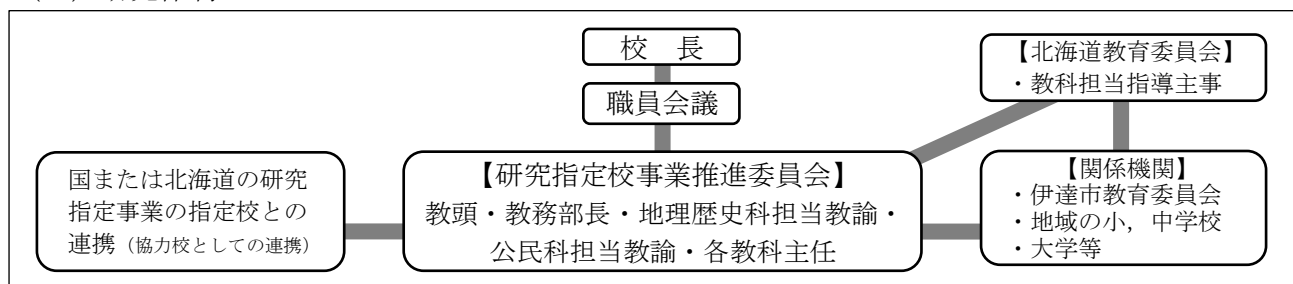
(2) 研究主題設定の理由

本校では、学習活動と部活動とを両立させ、健全な心身の発達を促す教育活動の充実を図っており、生徒は比較的落ち着いた学校生活を送っている。しかしながら、「北海道学力等実態調査（H27）」では、基礎的学力は概ね定着しているものの、「高校入学前に比べ学習意欲が高まった」と回答した生徒が 46.5%、「高校入学前に比べ授業以外の学習時間が増えた」と回答した生徒が 36.8%と道内平均を下回る傾向となっており、生徒の学習意欲・学習時間に課題がみられる。

このことは地理歴史科の学習においても同様の傾向がみられ、主体的に学習する意欲や態度、思考力・判断力・表現力等が十分育っているとはいえない。また、各科目で習得した知識、見方・考え方を活用したり、科目相互の関連性を踏まえて考察したりする力にも課題がみられる。

こうしたことから、世界史・日本史・地理において科目相互の連携を図り、歴史的な見方や考え方や、地理的な見方や考え方を育成するとともに、問いを追究する学習活動を通して学習意欲を向上させ、思考力・判断力・表現力等を育成することをねらいとして研究主題を設定した。

(3) 研究体制



(4) 1年間の主な取組

平成 28 年度	4月	○事業推進委員会，教科部会等において研究の方向性や方法について確認
	6月	○「地理歴史科授業・学習アンケート」（前期分）の実施，結果のまとめ・分析
	7月	○国立教育政策研究所「教育課程研究指定校事業」に伴う研究協議会 … 授業公開（世界史A，日本史A），調査官による講演，研究協議 等
	10月	○史跡北黄金貝塚を活用した体験学習「縄文遺跡体験学習」（1年）の実施
	11月	○公開授業週間における授業公開 ○先進校視察訪問（長崎県立佐世保北高等学校） ○「北海道高等学校学力向上実践事業」平成28年度教科指導講座実施校 … 研究授業，研究協議，外部によるアンケート評価 等
	12月	○「地理歴史科授業・学習アンケート」（後期分）の実施，結果のまとめ・分析
	2月	○先進校視察訪問（北海道浦河高等学校） ○次年度における指導・評価計画の作成
	3月	○研究成果の公開（学校ホームページ等）

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

ア 科目相互の連携を図った授業実践

- 世界史A（1年必修）において，日本史A（前近代については日本史B）と関連付けた授業実践を継続的に実施することで，生徒の学習意欲や学力にどのような変容がみられたか，ワークシートの取組状況，ペーパーテストの得点推移，アンケートの結果等から検証する。
- 地理A（2年選択）において，世界史A・日本史Aと関連付けた授業実践を継続的に実施することで，生徒の学習意欲や学力にどのような変容がみられたか，ワークシートの取組状況，ペーパーテストの得点推移，アンケートの結果等から検証する。
- 課題解決に向けた主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）や言語活動の充実を図ることで，生徒の思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上に結びついたのか，ワークシートの取組状況，ペーパーテスト，アンケートの結果等から検証する。
- 「授業公開」や「研究授業」を実施し，参加教員による研究協議を行うほか，アンケートによる外部評価を行い研究の参考とする。

イ 地域の関係諸機関との連携

- 伊達市教育委員会等と連携し，「縄文遺跡体験学習」（1年）を実施する。

ウ 授業・学習アンケートの実施

- 地理歴史科の授業や生徒の学習状況等についての実態を把握するとともに，課題を明確化するため，前期においてアンケートを実施し，結果のまとめ・分析を行う。また後期にも実施し，生徒の変容について把握するとともに，研究仮説について検証する。

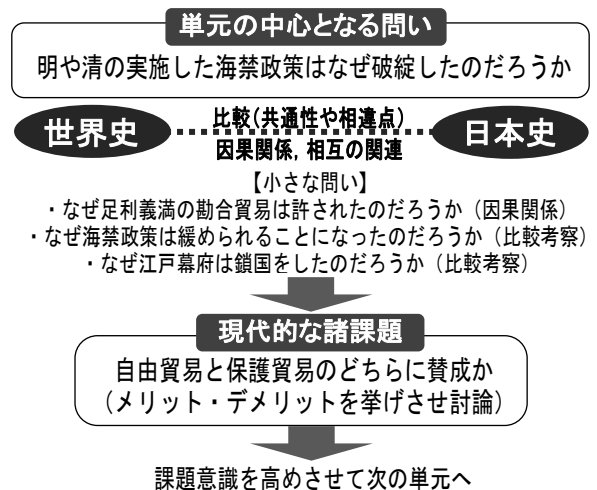
(2) 具体的な研究活動

ア 科目相互の連携を図った授業実践

1年の必修科目である「世界史A」において，日本史Aとの関連を重視した授業実践を継続的に実施した。各単元では現代的な諸課題にもつながる対立軸（概念）等を取り上げ，その課題が形成されていく歴史的過程や背景を世界史Aと日本史Aとの比較や因果関係などから把握させた。そのなかで正解のない課題への解決に向けて議論させたり，構想させたりすることにより思考力・判断力・表現力等が育成されていくよう，単元を構成した。

授業における学習活動では，生徒の思考を促すための「問い」を設定し，ペアワークやグループ学習（ジグソー法，ブレインストーミング等）などを取り入れながら追究させた。

▼日本史Aとの関連を重視した「世界史A」での単元構成一例



課題意識を高めさせて次の単元へ

また、2年の選択科目である「地理A」においても、単元のテーマとなる「問い」に対して、歴史的な背景から多面的・多角的に考察させる授業や、各地域の歴史や文化について、テーマを設定して発表させる主題学習を実施した。

例「広大な領土を持つ中国が、北京標準時の1つの標準時（統一時間）を採用しているのはなぜか」（単元「球面で世界を考えよう」より）
 「石狩川周辺の開拓の歴史と石狩川の流路変更にはどのような関連があるだろうか」（単元「さまざまな地形と生活」より）

これらの授業実践については、年に3回にわたる授業公開及び研究授業を行い、参加教員による研修を深めたほか、アンケートによる外部評価を実施した。

イ 地域の関係諸機関との連携

地域の素材・人材を活用した体験的かつ協働的な学習を通して、郷土の自然や文化遺産に対する理解を深めるとともに、歴史的・地理的な見方や考え方を育成するため、1年生を対象に、「縄文遺跡体験学習」を実施した。講師には伊達市噴火湾文化研究所学芸員の青野友哉氏を招き「世界の中の縄文文化」という視点から、世界史・日本史と関連付けて講義いただいた。

また、史跡北黄金貝塚公園での現地学習では、学芸員によるガイドのもと施設内の遺物を見学したほか、グループごとに植樹作業、道具を使った火おこし体験、食文化体験などを行った。

こうした学習活動を通して「なぜここに貝塚（縄文集落）が発達したのか」について、地理的条件を含めて生徒に考察させるとともに、自然環境と歴史が相互に作用し合っていることを確かめさせた。さらに、当時の生活や文化、縄文人のものの見方・考え方について触れ、現代人との比較からその共通点や相違点を考察させ、現地学習で学んだことをグループでまとめさせた。



▲青野氏による事前講義



▲「縄文の森」再生の植樹作業



▲道具を使った「火おこし体験」



▲食文化体験（縄文ハンバーグ作り）

3 研究の結果と今後の取組

(1) 研究の結果

○ 本校で実施している「定期考査（ペーパーテスト）」における平均点の推移

	1年「世界史A」	2年「日本史A」	2年「地理A」
前期中間考査（6月初旬）	49.2点（11人）	68.9点（0人）	65.4点（0人）
前期期末考査（9月初旬）	50.8点（7人）	68.2点（5人）	66.2点（0人）
後期中間考査（11月下旬）	58.4点（3人）	69.2点（2人）	53.0点（4人）

注：（ ）内の数字は「30点未満」の生徒数

○ 科目相互の連携を図った授業を継続的に実施した「世界史A」のクラスにおける生徒の変容【「地理歴史科授業・学習アンケート」（前期：6月，後期：12月）の結果】※肯定的回答の割合

質問項目	前期：6月初旬実施 ⇒ 後期：12月初旬実施	生徒の変容等
①「世界史」は全員必修とすべきである		前 43% ⇒ 後 37%（-）
②「世界史」を学ぶことは好きだ ※本校の場合は「世界史A」		前 50% ⇒ 後 38%（-）
③「世界史」を学ぶことは将来の仕事や生活に役に立つと思う		前 25% ⇒ 後 38%（+）
④「世界史」を学ぶことは大切だ		前 69% ⇒ 後 56%（-）
⑤「世界史」と「日本史」との関連を学ぶことは大切だと思う		前 79% ⇒ 後 83%（+）
⑥「世界史」の授業について意欲的に取り組んでいる		前 64% ⇒ 後 77%（+）
⑦「世界史」の学習時間は以前に比べて増えたと思う		後期のみ 62%

質問項目 前期：6月初旬実施 ⇒ 後期：12月初旬実施	生徒の変容等
⑧「ペアワーク」や「グループ学習」など、生徒主体の活動は好きですか	後期のみ 56%
⑨先生が説明・板書するよりも、自分で調べたり、友だち同士で説明し合ったりする方が、より理解が深まると思いますか	後期のみ 73%
⑩「ペアワーク」や「グループ学習」など、生徒主体の活動は、好きか嫌いにかかわらず大切だと思いますか	後期のみ 82%

【「地理歴史科授業・学習アンケート」(後期：12月)の結果】

「世界史Aの授業について」※肯定的回答の割合(他の教科とも比較した)

質問項目	世界史	国語	数学	理科	外国語
① この科目が好きだ	41%	55%	54%	55%	53%
② 授業内容は理解できる	58%	73%	58%	68%	64%
③ 意欲的に授業に取り組んでいる	74%	72%	68%	75%	72%
④ テストは難しいと思う	72%	55%	47%	73%	55%
⑤ もっとレベルの高い授業をしてほしい	5%	6%	14%	3%	18%
⑥ 話合いやグループ学習等の時間がある	87%	8%	12%	51%	90%
⑦ 宿題がよく出される	81%	15%	43%	28%	15%
⑧ 家庭学習に取り組むことが比較的多い	49%	20%	61%	34%	29%

- 学習アンケートの結果から、科目相互の連携を図った授業実践を継続的に実施することで、授業に対する意欲が向上する傾向が見られた。「世界史と日本史との関連を学ぶことは大切だと思う」と肯定的に回答した生徒は83%となっていることから、科目相互の関連付けを図ることで世界史の苦手意識を改善することができるのではないかと考えている。
- しかしながら、「世界史を学ぶことが好きだ」、「世界史を学ぶことは大切だ」と肯定的に回答した生徒の割合がやや減少しており、世界史に対する苦手意識の克服や学ぶ意義の深化についてはまだまだ課題が残った。自分で調べ、考え、発表する授業スタイルに生徒がとどまっていたことも影響していると思われるが、上記の点と併せて、次年度に向けて引き続き総合的に検証する必要があると考えている。
- 地域の関係諸機関と連携し、その素材・人材を活用した学習活動を行うことにより、学習意欲の向上や、科目相互を関連させて社会的事象を総合的に捉えさせる学習効果が期待できる。

【地域の関係諸機関と連携した「縄文遺跡体験学習」実施後のアンケート(10月中旬実施)】

質問項目	回答者数(割合%)	
①興味・関心を持ち、主体的に取り組むことができた。	37名(28%)	肯定的：66%
②興味・関心を持って取り組み、知識を広げることができた。	51名(38%)	
③体験学習で新しい知識を得ることができた。	42名(31%)	中間的：31%
④体験学習に意欲的に取り組むことができなかった。	4名(3%)	否定的：3%
⑤興味・関心が持てずに学習が終わった。	0名(0%)	

- 11月実施の教科指導講座に参加した教員から「研究授業は、科目相互の連携を図る上で大きなヒントとなった」などの意見が寄せられ、本研究が他校における授業改善の契機となっている。

(2) 今後の取組

- 研究の結果を踏まえ、生徒に成就感や達成感を味わわせる「年間指導計画」(单元ごとの「問い」の設定)及び「評価計画」(ルーブリックの作成等)の見直しと改善を図り、歴史的・地理的な見方や考え方を育成する授業実践を継続的に行う。
- 地域の関係諸機関と連携し、地域の教育資源等を活用した体験学習や、異校種交流等を実施する。
- 日本史と世界史との関連付け、地理と歴史系科目との関連付けを図ることの意味や意義について、生徒の変容などから調査し、検証する。